

平成29年度第1回埼玉県立近代美術館協議会会議録(抄録)

- 1 開催日 平成29年8月31日(木)
- 2 時間 午後2時00分～午後4時00分
- 3 場所 埼玉県立近代美術館 3階 会議室
- 4 出席委員 梶川 牧子、関根 隆之、布施 知範、松岡 滋、小田倉 泉
加藤 典子、小山 広毅、田村 禮子、新倉 美佳、野中味恵子、
帆足 亜紀、宮本 重雄
- 5 欠席委員 なし
- 6 事務局出席者 館長 建畠 哲
副館長 加藤 哲之
主席学芸主幹 大越 久子
担当部長 田沼 康雄
学芸主幹 平野 到
主任学芸員 梅津 元、渋谷 拓
担当課長 藤川奈美子、川崎 剛志(9名)
- 7 教育局出席者 生涯学習文化財課 中澤主幹(1名)
- 8 進行の概要
 - (1) 会開
 - (2) 館代表者挨拶(建畠館長)
 - (3) 事務局等職員紹介
 - (4) 会長、副会長選出
会長に関根委員、副会長に松岡委員が選出された。
 - (5) 会議録署名委員指名
会長から署名委員として松岡委員、小田倉委員が指名された。

9 議事の内容と質疑応答

(1) 報告事項・意見

ア 平成28年度事業報告

事務局から会議資料及び映像を使用して、平成28年度の常設展示事業、企画展示事業、美術作品収集事業、普及事業、美術館の利用促進事業、子供向け事業、学校との連携、ボランティア活動、「椅子」の有効活用、地域の核となる美術館・歴史博物館創造活動支援事業(文化庁助成事業)、一般展示室の利用状況、入館者数、決算の概要について報告を行った。

【主な質疑応答】

委員 企画展で、カタログが完売したのがあるということだが、それぞれ何部くらい印刷しているのか。

事務局 おおよそ1,000部ほど刷って800部ほど販売している。

委員 私もキュビズム展を拝見したが、展示も非常に充実していて、数字にも成果が出てよかった。

事務局 キュビズムは本文ページも含めてキュビズム風な大胆なデザインだったので、そういう興味で、お買い求めになる方も多かったと思う。

委員 企画展に関して、非常にバランスのいいラインナップで、独自性があるなど、改めて思った。都心の10万人、20万人入ったという企画展と比べると、観覧者数が1万人越えというものがなかったということは、物足りないという印象を持たれる場合もあると思うが、この内容で、安定した観覧者数を得ているのは、非常に素晴らしいことだと思う。

ラインナップとしても、都心で行われる近代西洋画の展覧会に名画系が多いのに対して、現代美術と近代のデザイン等、非常にいいラインナップだと思う。

これまで有料広報があまり使えなかったということは、非常に驚きだった。県内に対しては、工夫を凝らした広報や協力者との連携など、足で稼ぐ形で広報しているが、東京都心圏に向けてのアピールは、広報の予算をある程度つけてやらないと難しいと思う。特にラインナップが、都心の美術館とすみ

分けられているということ、デザイン等に意識が高い若者達や学生、埼玉県立近代美術館の企画展に興味のある東京都内の層に届ける手段として、有料広報は大切なことだと思う。もちろんインターネットやSNSも活用していけばいいと思うし、新聞記事や雑誌からの広報も大事だが、都内に向けては足で稼ぐというわけにはいかないの、広報に対してある程度予算を使っていくというの、いいのではないかなと思う。

次に普及事業に関しては、いつ見ても非常に多くて、毎週何かしらやっている状況で、全国でも一番普及事業が多い美術館の一つだと思う。アウトリーチも最近増えている。MOMASのとびらが出張するという、出張MOMASのとびらというアウトリーチもある。アウトリーチを行うためには、館内で行うのとは違う独特のノウハウがあると思うが、それをどこに蓄積していくかということ意識していただきたい。学芸員の中に蓄積されていくということも大切だが、それだけだと学芸員の負担が果てしなく増えていく。学芸員が動けない日は現場に行けないということになってはいけない。もちろん長くアウトリーチ活動をしてくださっている方にもノウハウを蓄積していただき、ボランティアの方等そういった事業に関心のある方に現場のスタッフになってもらう等、ノウハウの蓄積の器を分散させていくといいと思う。

また、アウトリーチで、一学年80人などの人数で行うのは、独自のノウハウがあったとしても大変なことだと思う。私の経験だと、やはりークラスくらいの単位でやるのが非常に効率的だった。例えば、午前ークラス、午後ークラス程度で一時限の中にはまるように行うほうが、関心のない子も巻き込んでいくという部分では、講師の負担が減る。ただ学校側の要請としては、限られたクラスだけでなく、学年全体で行うということだと思うので、どうバランスを取っていくかが難しい。

続けて、SMF(Saitama Muse Forum)が独立するのは、非常にいいことだと思う。さいたまトリエンナーレという、市の組織やボランティアも含めた輪が一つできて、また、SMFという公的な美術館や専門家も入ったネットワークも独立してできた。公的な支援のもと立ち上がった市民の文化活動が、最終的には自立しなければ継続が難しいというのは、これまでも言われてきたことで、県も恒久的に予算をつけていくことはできないし、文化庁も新しい試みには予算を出すけれども、継続事業には予算がとりにくい。もちろん予算的な支援として県や国の予算を使ってもいいと思うが、独立しなければ、その支援が無くなった時に動けなくなってしまう。そういう意味でも、今迄どおりノウハウや信頼性を持つ埼玉県立近代美術館を窓口としつつ、

実働部隊は切り離されていくというのは大賛成。

ただ、さきほど報告された普及事業の実績の中で、4万2千人がSMFアート関連としてカウントされていたと思う。それが美術館の事業ではなくなったときに、前年度比約4万人減となるので、事前に県の方によく説明したほうが良いと思う。

事務局 有料広告の話があったが、公立の美術館ということもあって、あまり有料広告費を出すという考えはなくて、パブリシティでやれというか、記者発表をすることによって新聞やメディアに取り上げてもらうという感覚が非常に強い。しかし、美術館というところには、そういうことが必要だと思う。私としては、有料広告費をとれるように、財政当局とは引き続き調整していきたいと思う。

委員 県域ではそういったやり方でいいと思うが、広域での利用者数を上げていくには、どうしても予算が必要。

事務局 おっしゃるとおり。

委員 アウトリーチ、ミュージアムキャラバンで高田洋一さんという方が活動されたということだが、是非来てくださいというような協力的な学校があまり無いということだった。なぜこれが、どこの中学校も小学校も是非来てくださいというふうに広がっていかないのか。毎年同じ学校が依頼しているのか。アーティストの方一人では難しい場合、ボランティアや保護者等のお手伝いの方がいらっしゃるのか。

事務局 引く手あまたではない。実施する場合は、一学年全部平等にやらなければならない。その場合、一定の授業数を、学校側の方でやりくりしてもらわなければならない。それが学校側の負担になり、実質的に難しい場合は、受け入れていただけない。また、準備そのものにはあまり負担をかけていないが、外部からのかかわりに対して、学校側のガードが固いということもある。そういった理由から、美術館側から知っている先生を介して声をかけているが、先生自身に興味を持ってもらえても、学校として許可がでないということはよくある。その結果、平均して年2回くらいになっている。

2回連続で実施した学校もあれば、前は実施に至らなくても、次の時は実施してくれるというふうに、少しずつ増えてはいる。ただ、そういう状

況なので、すごく広がるという感じではない。実施した学校ではよかったと言ってもらえるが、それを聞きつけて他の学校から、どんどん手があがっていくという状況にはない。学校に頼らず、先生方とのネットワークを広げ、強化していくところから、今年は力を入れなくてはいけないと思っている。

委員 子供なので、例えばプライバシーの問題があって、SNS上で広めたりするのは難しいのか。

事務局 取材を受けた新聞の地方欄に、翌日ちょっと掲載されることはある。ネット上での普及は難しい。

委員 私も「土曜チャレンジスクール」等で写真を撮っても、なかなかネット上にあげられない。顔は写らないようにしてほしい等の要望があり、なかなか楽しさが伝わらなくて困っている。

事務局 特に動画で宣伝できると、楽しさが良く伝わると思うが、子供の顔が見えるような写真には、普段から特に気を付けているため難しい。

委員 来館者数の中で、県内全体から平均的に県立美術館に来館しているのか、比較的さいたま市の市民が多いのか、その中で、一般の方が多いのか、若い方たちのパーセンテージはどのくらいか、というような分析はしているか。

事務局 どこから来館しているかということについて、全体的に調査をしているデータベースはない。そのような調査は難しいが、例えば企画展の来場者の中でアンケートに答えていただいた方が、どこからいらっしゃっているかというデータはとっている。その結果、県内、さいたま市の比率が高いというのは正直ある。都内からの来館者数は、割合としてかなり少ない気がする。理由としては、東京都に対してPRが不足しているということはあるのだろうが、東京都内には様々な美術館という巨大な市場があり、わざわざ東京の方がこちらの美術館まで来るといふことの動機づけには、かなり特殊なものが必要ではないかと思う。ちょっと際立っていて他にない、東京都内の美術館と差別化できているものについては、都内からお客さんが大勢来るといふこともあると思う。ただ、そこは県立美術館としても難しいところがあり、東京都民をターゲットにするというわけにもいかない。ある程度一般の方に見ただけのものもやりつつ、特色のあるものもやるという、バランスを取

りつつやっっていくことが、県立美術館の使命だと思っている。

委員 今使命という話があったが、拝見していると、子供たちを対象に多くのイベントを実施していて、近在の子供たちは幸せだと思った。私が住んでいる市にも小さな美術館あるが、学生等の来館率は大変低い。個人的な考えだが、このように子供たちに芸術のシャワーを浴びさせておけば、将来他の土地で何かの文化や芸術に触れ、それをアンテナにして、育った地域に戻ってきたときに、また美術館に足を向けるとか、そういう方法を取っていくためには、この子供たちに対するイベントはとてもうらやましい。

委員 教育委員会への情報提供や、学校の先生の研究発表等、何らかの形で、「こういうのをやってよかったよ」という先生間に口コミが広がることが大切。最近では学校の統廃合も進んで、ひと学年の数が非常に多くなっていて、カリキュラムにも余裕がない。静岡県内にも夏休みの期間を非常に短くして、年間の授業数を均すことによって、教職員の負担を減らす方針に踏み込んだ自治体がある。そういった学校は夏休みが非常に短い。ほかの学校の半分程度しかない。そういう風にしないといけないくらい非常に今、先生方の負担も大きく、アウトリーチを受け入れる余裕がない。ただ、面白いと思う先生は必ずいるので、そういう先生を見つけて、つかんで、そういう先生に異動先の学校でもやってもらえるように。そこで、それを見ていた他の先生方が、異動先の学校で受け入れてくれる様な形で広げていくしかないと思う。受け入れてくれる先生を大切にして、調整しつつ広げていくのが王道だと感じる。

委員 学校に対して「こういう事業を行っている」という広報は、県内全ての小中学校、高校に、毎月美術館から資料が送られて来ているので、情報が届いていないということはない。それから美術教育連盟の役員研修会でも、美術館の方からお話をいただいている。それから、毎年8月に造形教育研修大会という全県の先生方対象の研修会が2日続けてある。そこでも、毎回ではないが美術館の教育普及担当の方に入っただき、先生方自身が研修するという部会も設けている。ではなぜ広がらないかという話になるが、皆さんは中学校の1, 2, 3年生の子供たちが週に何時間美術を学んでいるかご存知ですか。今の中学生は実質週に1時間しか美術は学ばない。年間で35時間です。もう少しきちんと言うと、1年生は年間45時間学ぶ。でも年間で45時間です。3~40年前は、1年生は70時間、2年生も70時間、3年生は35時間という授業スタイルだった。そういう中で、授業を行っている

ので、どちらかという制作に、たくさんの時間が割かれている。35時間の中で絵画、彫刻、工芸、デザインなどの制作、鑑賞もやるというのが、年間のカリキュラムだ。この中で何かを落としてしまうことはできない。35時間に押し込めていく。そうすると、こういうプログラムをどこでやったらいいか、それは学校によって変わってくると思う。35時間のどこかのプログラムの中に上手く入れていく。或いは総合的な学習の時間を使って、そこで工面していく。ところが本校の現状を見ても、総合的な学習の時間にやりたいと思うプログラムは、もうキツキツで入っている。中学校は教科担任制だから、美術の先生が提案して、全校の先生方の同意を得られればいいが、それぞれの教科でやりたいことがあるので、なかなか難しい。だからそういうところがクリアできていくと、もっと普及するだろうと思う。

また、70～80人くらいを一度に動かすのは、さほど大変なことではない。私の友達のサイエンス・インストラクターで、先ほどの高田洋一さんの「種飛ばし」とほとんど同じ実験をする方がいる。かつてやっていただいた時は150人で実施した。内容にもよると思うが、小さい集団で行っても、大きな集団で行ってもそれなりの効果はある。

先ほどの話にもあったが、一学年4クラスあれば4クラス全員が経験する、体験することが必要になってくる。そうすると、ほかの教科もある中で、なかなか難しいところはあるかもしれない。比較的小学校の方が実施しやすいと思う。中学校は教科担任制で、それぞれの教科ごとにカリキュラムを組んでやっているのだから、例えば、授業を変更して同じ時間に4クラス入れたとすると、そのために当初予定していた教科が出来なくなってしまうクラスが出てくる可能性もあるので、非常に苦労しながら授業の組換えを行っているのが学校の実情だ。

先生方も「面白いな」「やってみたいな」という方はたくさんいると思うし、私も、何とかこういう事業が普及していくといいなと思うので、美連でも話はしている。いろんな壁があることも理解していただいて、少しずつでも広がっていったらいいなという気持ちで見えておいていただければと思う。

事務局 出前では、一時間単位の図工の時間等に、美術館の作品の話や椅子の話をしたりする「授業協力」を、年間約40校で行っている。他にだいたい80校から90校くらいの学校が、毎年団体で来館している。実際のところ、それだけの数の子供たちを美術館で受け入れ、さらにこちらの手間を必要とするアウトリーチを行うとすると、現実的には年間2、3校が、今の現有スタッフではぎりぎりだと思う。ただ、例えばアウトリーチのボランティアとか、

埼玉ミュージアフォーラムのようなNPOも参加してやっていくことで、そういう仕組みによる実施の可能性が、少しでも広がるのであれば、私たちがまいた種が多少は役に立つのではないかと思う。

委員 出前をお願いした時に「この日にやっていただく事は可能か」という学校が要望する日時に、どのくらい合わせてもらえるのか。

事務局 完全予約制なので、空いてさえいれば受けている。

イ 平成29年度事業実施状況

事務局から会議資料及び映像を使用して、平成29年度の常設展示事業、企画展示事業、美術作品収集事業、普及事業、美術館の利用促進事業、子供向け事業、学校との連携、ボランティア活動、「椅子」の有効活用、一般展示室の利用状況、入館者数、当初予算の概要について報告を行った。

【主な質疑応答】

委員 これまでの川原慶賀展、遠藤利克展、どちらも拝見した。よかったと思う。私は歴史の活動をしているが、その仲間である歴史好きの人たちも、川原慶賀に興味をもっていて、よかったと思う。遠藤利克展の方は、担当学芸員が本当に頑張ってくれたと思う。観て直接感じるそういう作品だったと思う。非常に大きな作品なので、会場の広さに限界があるとは思いますが、柱が12本丸く配置されている作品が展示されたスペースに入るまでのところが、少し通路が狭くなっていた記憶がある。ギャラリートークに参加した際、「どうぞ中に入って感じてみてください」という案内があったが、もし車椅子の人だったらスペースがギリギリで、大丈夫かなと心配するようなところがあった。ただ作品との兼ね合いがあるから、それ以上広げたらこの作品は成立しないということになれば、それはそれで難しい問題であると思う。その点が多少気になったが、とてもいい展覧会だった。

次に、子供たちに関する事業について、先ほどから、非常に充実しているという意見が出ているが、私も同感で、これからの子供たちにそういうチャンスがたくさん味わってもらうことを大切にしたいし、継続して行って欲しい。

一方、高齢者の方々に対して、もう少し親しみやすいような展開が可能な

いかと思っている。2025年には団塊の世代が75歳を迎える。非常に大きなマーケットになるのではないかと思う。それまであまり美術に関心がなかった人もターゲットにしていく考えがあるのか、それとも子供たちに関する事業が多く、高齢者に対してはあまり積極定期に取り組めないのか伺いたい。

事務局 僕も高齢者になったが、数年前に残念な県の決定があり、それまで無料だった65歳以上の常設展観覧料が有料になってしまった。高齢者の方は年金で生活されている方がほとんどなので、観覧をあきらめて帰る方がいらっしゃる。本当に残念。それについては、何らかの形でまた復活させていただくよう、県の方にも働きかけたいと思うが、全体の方針だから。埼玉県だけでなく、ほかの自治体でもそういう方針をとっているところはある。

もちろんサービスはしなくてはならないのだが、学校教育と連携していくということもあるし、小学校時代に3回美術館に来ると、ずっと美術館に来る習慣がつくというような統計もあるようなので、特に子供たち、小学生や、比較的時間的余裕がおりになるだろう高齢者の方は、我々にとってはサービスしていかなければならない対象だと思う。

それから、僕の個人的な考えだが、その2つの年齢層は地域のコミュニティの中で展覧会を観るという傾向が強い。通勤している方等は行動力もあるし、見たい展覧会があれば、東京でも鎌倉でもどこにでも出かけていく。だからといってそういう人たちにサービスをしないというわけではなく、もちろん大事だが、ここは県立美術館なので、やはり地域のコミュニティに対して我々が一番責任を持っていると思う。

地域のコミュニティといっても埼玉県は、かなり文化圏が分かれているところがある。どうしても美術館というのは地場産業だから、やはり近い方の人たちに親しまれる。もちろん県立だから全県に対してというのは考えるが、公共交通機関で来館しづらいところもあって、そういう人たちにどうアピールするか。駐車場があれば来るといって人が多かったので、駐車場とのタイアップも行っている。いろいろなことをしながら、サービスの幅を広げている。

話が広がりすぎたが、年齢の高い層の人たちにも、我々は是非来ていただきたいと思うし、そういう人たちがお仕事をリタイアされたときに、この美術館に来るのが楽しみだという方がいてくれれば我々もやりがいがある。

基本的には自治体がやっている場合には、納税者に対する考えは一義的なことだと思うが、観光政策として成功している美術館がある。金沢21世紀美術館等は、入館者のほとんどが市外県外の人たちだが、大きな意味でそこ

に公共投資して効果を上げている。他県他地域からの吸引力を持つ美術館というのは、美術館だけではなく、例えば金沢21世紀美術館は、金沢という町と一体化しているし、横浜美術館も帰りに中華街へ行こうというのが定番化している。よくわかるのは、神奈川県立近代美術館は鎌倉に本館があったが、それを昨年鶴岡八幡宮に返してしまって、今メインが葉山にある。鎌倉というのは近代美術館の出発点で、公立では一番早く、国より早くできた近代美術館で、非常にステイタスも高いし魅力もあるが、鎌倉だからよかった。葉山に移って、すごく素晴らしいロケーションで光景もいいし、一般的に言えば悪い場所ではないが、来館者は激減したといていた。

観光プラス美術館という、それで成功している富山とか金沢とか、かつての鎌倉とか、そういうプラスワンの方針はこの美術館はダメ。交通の便が良くて駅から歩いてこられる条件のいい美術館で、しかも公園の中にある。駅前かつ公園の中という非常にいい条件に恵まれているがプラスアルファがないので、観光的戦略によるアピールは望めないところ。プラスアルファ型の美術館とは別に、この美術館はこの美術館で独自に自分たちの路線を維持できている。その分だけ地域の人たちに向けてより厚いものを仕向けていくこともできるし、先ほど褒めていただいたように、子供たちとの連携プロジェクトのようなものも勝機があるので、善し悪しだと思うが、私はこういうロケーションだから、足の便は決して悪くないので、むしろかなり恵まれているので、そうした観光地型とは違った美術館の在り方を追求していこうと思っている。

委員 高齢者の居場所の中の一つになる様な美術館というイメージを、持っていたらと思う。

委員 駐車場と提携しているという話は、初めて聞いた。ここは車では来られない美術館という認識が高い。

事務局 無料というわけではない。専用駐車場ではないが、少し割引になる。

事務局 ご観覧いただくと割引になるという提携駐車場が17号沿いにある。昔労働会館という建物が建っていたところだが、その跡地にできている駐車場と提携しているので、観覧いただくと割引になる。

事務局 少し宣伝が不足しているかもしれない。

委員 無料だったら一番いいのだが。私はさいたま市ではないので、普通どこへ行くにも、車で行くというスタイル。そうすると、さっき高齢者の話があったが、車で行けるということになれば、家族と一緒に、足がちょっと不自由でも来られる。歩くのがちょっと億劫でも、車への対応がもっと広がってきて、そこから車椅子に乗れば行けるといえるようになるれば来館しやすいというのは、開館当初から思っていた。今の社会だとやっぱり車で行けるか行けないかというのは大きいような気がする。例えば観光資源がなくてもここに来て、車だと自由に移動ができるので、ちょっと遠くに出て、そこで何か楽しんで家に帰るといえることもできる。もう少し車への対応をしてもらえると嬉しい。

委員 車だったら、まあ鉄道でもそうだが、盆栽美術館とか鉄博とかあるので、結構ぐるっと回って楽しむこともできる。風光明媚な大自然というのはないが、大宮の氷川神社だとかそういう目立つものはある。

委員 購入基金3億円というのは非常に大きなニュースだと思う。購入基金が積まれたというのは、前に勤めていた財団でいろいろ調査をしたが、非常にすごい事だと思う。今や基金を積んでも運用益が出ないので、それに何の意味があるかということになってしまう。使わない3億円をずっと基金に積んでおくことに議会が納得しないと思うが、購入基金を積んでいる美術館というのは、作品を集めようとしているというアピール度が全然違う。そうすると、寄贈や寄託の情報も入ってくるし、いろいろな情報が学芸員のところに集まると思う。

あともう一つは、今年の企画展二つ、「遠藤利克展」は展覧会自体が一つの事件で回顧展だから、図録完売というのもわかるが、その前の「川原慶賀」も図録完売。その前の「キュビズム」を入れると3件連続で図録完売。その図録分で予算が増えたりして、いいサイクルになっていると思う。図録は私も大切だと思っていて、それはやはり一つの研究成果だと思う。それが完売するというのは、この美術館の研究力というものに対する信頼性が高いということ。ちゃんと研究してくれる美術館に作品は買ってほしいし、同じ値段を提示されたときは、いい研究をしてくれる、いい展覧会をやる美術館に売りたいし、寄贈や寄託する方々も同じことを考えると思う。この後開催される「版画の景色 - 現代版画センターの軌跡」なんかも地味だが、とても大切な展覧会で期待しているが、こういう研究性の高い展覧会をしっかりとやって

図録を出す、しかも購入予算もあるとなると、あるべき姿にいち早く立ち返って、美術館としての本道を取り戻したというか、非常にいいニュースだと思う。美術館業界の中でしかあまり話題にはならないと思うが、これは非常にじわじわと効いてくる。埼玉県立近代美術館にいい作品が入るということは、埼玉県民の文化的資産が増えるということだから、これはとても重要なことだ。あとは展覧会のラインナップ、購入資金、今の企画性の高いMOMASコレクション展の3本柱を是非これからも維持していただいて、県の方からもアピールしていただいて、この基金の活用を見える化していただきたい。

事務局 県に何回もアピールしてきたが、ずっと十数年門前払いのような感じだった。我々からモーレツに働きかけたというわけではないが、議会の方が一回来てくださったということもあったようだ。やはり美術館というのはきちんとコレクションするべきだという正論があってこうなったと思っていて、非常にうれしい。その基金をどういうふうにするかということに、これから知恵を絞っていく。またいろいろ委員の方々にもアドバイスをいただいて、一番有効な方法を考えていく。

委員 瞬間的な出物に対応できるというのが一番大切なこと。

事務局 それからいい情報が集まってくる一つのきっかけになるのではないかと。やはり、購入しないということがわかっていると、その分だけ社会との接点が少なくなっていく。今回こういうことで、作品購入に限らず、社会との接点ができ、いろいろな効果があがっている。だが、今まで十数年買ってなかったので、貧すれば鈍すというか、お金の使い方を知らない。

委員 その3億円というのは、使わなければ返すというようなことは、しなくてもいいお金なのか。

事務局 基金で作品を買ったと、その作品を県がさらに買い戻す。県が買い戻すと基金にお金が入ってまた3億円に戻る。買い戻しという予算がつかないと、基金にお金が入らず現金が減るだけの状況になる。ただ基金にはお金があるので、買えなくはない。もちろん買えるが、買った後の、3億円を維持するためには、それを県がさらに買い戻すという予算を、翌年以降につける必要がある。基金で買ったものというのは、基金の所有であり、県の所有ではない

状態になっている。それを県が買い戻すと、作品は県の所有となり、基金も3億円という元の状態に戻るという仕組みになっている。それをずっと維持していくには、買った後にちゃんと県が買い戻してくれるという仕組みが流れていくことが必要。現状では基金の現金が3億円あって、基金として絵が買えるという状況にある。

事務局 だから我々も、使ったらどんどん補填してくれるとは限らないので、使い道はやっぱり考えながらやっていく。また0になって、何もなくなってしまうということにならないように、慎重に一気に使わないということ。もちろん素晴らしい出物があれば一挙に使うことはあるが、まあ、何回かに分けて。これからいろいろ相談していきたい。

ウ 博物館評価について

事務局から会議資料を使用して、博物館施設評価の目的や対象施設、平成28年度の評価結果、平成29年度評価について報告を行った。

【主な質疑応答】

委員 学校現場との連携ということがあるが、幼稚園は対象にならないのか。

事務局 対象になる。

委員 いままで実績はあるか。

事務局 ある。幼稚園から小学校低学年くらいだと作品を展示室で見るというより、椅子に座って楽しむとか、そちらのコースを勧めている。

委員 平成29年度の館別独自項目の8番9番の満足度の目標値が80%になっているのはなぜか。平成28年度の目標値が92.0と95.8になっているのに80%という設定の意味は何か。

事務局 当初の設定は前年度の実績で設定していたところだが、評価小委員会の委員のご意見もあって、あまり高止まりした目標設定はどうなのかというところから、全館共通で80%を目標にしようということになり設定をしている。当館は90%以上、95%くらいになっていて、頑張ってもなかなか達成できないという状況が現実的にはあり、各館も同様の状況があるため、現実的なところに即してみてもらえたらというのが強い。

委員 数値的なところで企画展の入館者の目標値が5万2千人というのは、去年も企画展によって幅が、差が大きいようだが実績なのか。

事務局 過去の企画展の実績などを基にして、5本企画展開催予定だが、それに対して目標値を定めており、その合計が5万2千人ということである。

事務局 実績との差が確かにあるが、予算を組み立てる際にそれぞれの企画展に対して何人の観覧者があり、収入がどのくらい入るということも予算として組んで作るのだから、必ず数値が先に出てくる。絶対的な根拠があるわけではない

が、それを目標に毎年やっている。

委員 2年前くらい前に非常に多い展覧会があって、それが平均値を押し上げているということはないのか。

事務局 草間彌生展をやった時の数字が高かったので、何年間かを平均するとけっこう高いものになっている。

委員 いつも思うのだが、数値目標はもちろん指標だが、展覧会に関してはその時の話題性や風潮みたいなもので一気に増えて、予想以上にお客様が入ってしまう展覧会がある。それがずっと負債みたいに評価を苦しめるというのはおかしいのではないかと思う。小委員会のご意見の80%というのは私も大賛成で、全ての数値目標が前の年を超えていかなければならないというのはブラック企業みたいで、前の年より業績を落としたらクビみたいな、そういうことではないのではないか。前も申し上げたことがあったかもしれないが、その時その時の事業の内容と展覧会のラインナップを見て、もちろん予算申請の時に低く見積もると予算が足りなくなってしまうが、実態に合わせて設定すべき。写真の展覧会と草間彌生とかが戦うのは厳しいと思うので、たとえばデザイン系の展覧会であれば、過去10年前はこれくらい入った展覧会があったとか、ジャンルごととか、もう少し好意的に利用率の設定がなされるといい。9項目中8項目未達みたいなことは、非常に見栄えが悪いので。もう少し指標自体に問題がないかというか、設定の方でご検討いただくといいのではないかと思う。

委員 今の質問の中で、この評価は職員の評価と直結しているのか。

事務局 職員の評価に直結することはないが、やっぱりその美術館というところで、数字を無視してやっていい時代の流れではない。目標と評価ということを、美術館も博物館も数字できちんとやっているということで、県内全館取り組んでいる。

委員 入館者数が28年より29年の方がいい数字が来ているように見えるが、過去の推移も把握されていると思うが、傾向的にはどういう方向か。

事務局 必ずしも増えているというわけではないが、ちょっと突出した年度があって、少し落ち着いたというか。改修後は若干ずつ増えている。

委員 先ほど館長さんがおっしゃっていた、金沢とか観光と密接しているところはとても成功しているというお話だったが、ここはそういう観光みたいなものはないということだが、同じ県立の美術館で相対的な比較みたいなものがある、入館者数を取るとすれば、埼玉県立近代美術館は、関東の中ではこの位置づけだとか、全国の中ではこのくらいにつけているということはあるのか。

事務局 正確な統計はちょっと覚えていないが、以前比較したときは、県立美術館としては中の上くらい。まあ、いい方には入っている。ただ、金沢21世紀美術館のように驚異的に多い美術館がありますから、年間200万人とか。そういうところを除いて、オーソドックスな県立美術館としてはかなり健闘している。ここは観光地ではなくて、先ほど申し上げたように、立地条件は悪い。県立美術館では、静岡とか素晴らしいロケーションだが、行きにくいところがある。一時期、郊外型の緑豊かな自然の中というのが、次々次々、県立レベルで出来たところがあって、そこはけっこう苦戦している。例えば、滋賀県立近代美術館は、廃館ではないけど完全に方針転換を迫られていて、今度は非常にユニークな、近代美術館とは違った運営をするので、それで成功するかもしれないが。ロケーションが不便でも、意外に人がいっぱい集まるところがある。たとえば霧島アートの森という、とんでもなく不便なところだが素晴らしく人が訪れる。そこは観光と一体化しているとか、いわゆる公共交通機関はないが、車でのアクセスがすごくいい。まあ、いろんな美術館があっていいので、一つの定型パターンじゃなくていいと思う。ここはそういう意味では非常にオーソドックスで、いろんな条件がバランスよくあるので、我々は堅実に、確実に、オーソドックス路線を歩もうという風には思っている。それなりの入館者も確保できているし、まあまあバランスいい評価を受けているのではないか。ただ、右肩上がりである必要はないけれども、人がたくさん入るとすごくうれしい。入場者数が目的ではないけれども、なるべくたくさんのお客さんに観ていただくという努力は常にしている。

- その他 -

なし

(以上)